



Title	対話原理に基づく基礎日本語教育：理論と実践
Author(s)	滝井, 未来; 義永, 美央子; 岡崎, 洋三 他
Citation	日本語教育国際研究大会名古屋2012予稿集第2分冊. 2012, 2(B20), p. 48-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/25299">https://hdl.handle.net/11094/25299</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 対話原理に基づく基礎日本語教育 —理論と実践—

西口光一（大阪大学）  
滝井未来（大阪大学）  
義永美央子（大阪大学）  
岡崎洋三（大阪大学）

### 1. 背景と目的

#### 1.1 背景

これまでの初級日本語教育はソシュール的な現代言語学のパラダイムの下に行われてきた。そのような従来の教育方法に対し、発表者らは対話原理に基づく基礎（初級）日本語教育を実践している。

#### 1.2 対話原理

対話原理はミハイル・バフチンが提唱する言語観である。その要諦は以下の通りである。

- (1) あらゆることば=発話は、その発起者から他の誰かに差し向けられている。あらゆることば=発話は、差し向け性（addressivity）を持っており、送り手から送り先に向けられている。
- (2) ことば=発話は、社会歴史的な慣習的側面と、個別具体的な実践という個別的な側面の両方を有している。つまり、ことば=発話は、実践の歴史を通して沈殿した意味や心的態度を染み込ませて現下の社会的交通に臨んでいる対話者にやってくる。ことば=発話とは、社会的交通の契機の諸条件への具体的な応答である。
- (3) どのことば=発話も「人格の声、意識の声」（Holquist, 1981）である。

そして、言語の習得（あるいは人格の形成）は、対峙的な相互行為実践（対話）の歴史を通して形成された、発話の相対的に安定した様式つまりことばのジャンル（バフチン, 1988）、あるいはその要素である言葉遣い（バフチン, 1980）を他者の相互行為実践から流用して我が物にする（appropriation、バフチン, 1996）ことによって進行するとバフチンは考えた。

#### 1.3 カリキュラム方略

新たな基礎日本語カリキュラムを以下のような原理に基づいて策定した。

- (1) 対話的状況の中で言語を促進する。
- (2) 自分のことについてあれこれの言語活動=自己表現活動をカリキュラム内の単元（ユニット）とする。
- (3) 言語事項（を学習すること）は、言語活動従事に伴って必要となるという副次的な位置に置く。しかし、体系的・系統的に扱う。必須な言語事項や言葉遣いはできるだけマスター・テクストに織り込む。

これが、対話原理に基づく、自己表現活動中心のマスター・テクスト・アプローチによる基礎日本語教育のカリキュラムとなる。

### 2. N E Jを使った学習—マスター・テクストからの流用と補充

#### 2.1 マスター・テクスト

N E Jでは、3人の人物が登場して、ユニットのテーマについて語る。これが、学習者が言葉遣いを流用する元となる、教材の中核のマスター・テクストである。

#### 2.2 日本語の学習と指導における対話

対話原理に基づく基礎日本語教育では、対話的な状況が学習と学習指導においても創造されることが期待されている。

- (1) 登場人物と学習者との（潜在的な）対話
- (2) 登場人物と学習者の（潜在的な）対話にからむ教師と学習者の対話
- (3) 教師と学習者との対話
- (4) 登場人物たちと学習者の対話
- (5) 学習者同士の対話

このような各種の対話の経験を通して他者

の言葉遣いを流用し、また必要に応じて言葉を補充することで、日本語の習得を促進することが期待されている。

### 2.3 学習者のエッセイの分析

タイプの異なる学習者のエッセイから、彼らがマスター・テクストからどのように流用と補充を行っているのか、学習時間が増えてくるとどのような変化が見えてくるのか、学習に対して意欲的である学習者ではどのような授業の展開が可能であるか、等についてデータに基づいて検討する。

### 3. 特定目的を持つ学習者集団を対象としたカリキュラムと教材の開発—研究留学生を対象として

大学院での学位取得を目指す留学生(以下、研究留学生)は、日本留学の目的、必要となる日本語のジャンル、専門性の高さなどの点で、他の留学生と比べて顕著な特性を有する集団である。本発表では、そのような学習者に対する基礎日本語のカリキュラムと教材の開発について、具体的にはNEJをプロトタイプとして内容を研究留学生に特化したマスター・テクストを中核とする教材(NEJ for Graduate Students、以下NEJGとする)の開発の実際について報告する。

NEJGでは、2名の登場人物(文系の女子研究生と理系の男子大学院生)のナラティブ(マスター・テクスト)に日本語の基礎語彙と基本的な文型・文法事項が織り込まれており、学習者はそれらを適宜流用しながら、自己表現を行う。学習者はこれらの過程を通じ、基礎的な日本語力を身につけると同時に、今後自らが経験するであろう、日本の大学院での研究生活も垣間みることができる。実際にこの教材を使った学習者においては、自らと近い特性をもった登場人物への強い関心と愛着も観察された。

本実践から、同様にビジネス・パーソン、看護士・介護士、主婦、高校生などといった特定の学習者のための教材を開発することにより、入門・基礎の段階から学習者の特性に

合致したカリキュラムを提供できるものと予想される。

### 4. 実践上の可能性と課題

#### (1) 可能性

学習者が対話をしながら自身のナラティブを書くことを通じて自己表現活動が持ち得る種々の潜在力を指摘することができる。自己表現活動を通じて学習者の自己肯定感が高まり学習意欲が向上すること、4技能の統合的育成ができること、「基礎」としての基礎的な力および「声」の獲得、授業改善のヒントが得られやすいこと、学習者間のレベル差が相対的に乗り越えやすいこと、授業でのパフォーマンスとエッセイによって学習成果が可視化されること、などである。

#### (2) 教師としての課題

読み書き能力の育成の工夫(特に非漢字系学習者)、ナラティブにおける「図」としての言語事項と「地」としての文脈との適切性と豊かさの理解、自己表現活動において顕在化する多様な「自己」の教育指導的解説、学習者が抱える生涯発達の課題との「対話」、よりよい形成的な評価、教師自身の自己表現活動についての認識と日常実践、などがある。

#### 【参考文献】

- ミハイル・バフチン、伊東一郎訳(1934-36/1996)『小説の言葉』平凡社
- ミハイル・バフチン、北岡誠司訳(1929/1980)『言語と文化の記号論』新時代社
- ミハイル・バフチン、佐々木寛訳(1952-53/1988)「ことばのジャンル」新谷敬三郎他訳『ことば 対話テクスト』新時代社
- Holquist, M. (1981) Glossary. in Bakhtin, M.M. (1981). Holquist, M. (ed.) *The Dialogic Imagination*. Austin Texas: University of Texas Press.
- 西口光一(2012)「言語活動従事に関与している知識は何か—バフチンの対話論の視点」『多文化社会と留学生交流』第16号 pp.51-62
- 西口光一(2012)『NEJ: A New Approach to Elementary Japanese—テーマで学ぶ基礎日本語』くろしお出版